

加藤大鶴著『漢語アクセント形成史論』

石山裕慈

平安時代以降の調点資料や古辞書を調査していると、漢字に声調を示す声点が付された例にしばしば遭遇する。それぞれの声点が指し示す具体的な調値も明らかにされているほか、漢語を形成した際には日本語の性質に合わせて連音上の声調変化などが起こることも、すでによく知られた事実である。このような資料を目の前にすると、漢語アクセントの歴史的研究というテーマは、取り組みやすそうなものと思えてくる。

まず根源的な問題として、日本漢語のアクセントというのは、中国原音とどのような関係があるのかという論点がある。これは、最初に当該漢字それぞれに記入された声点と、原音である『広韻』や呉音の声調とを比較・対照する作業を行い、次に複数の漢字から成る漢語のアクセントというのが、個々の漢字の声調を足し合わせたものかどうかを調査するという手法が考えられる。さらに、漢語のアクセントが、どのような歴史的変遷を遂げたかという論点もある。二拍の和語の場合、第一類から第五類までに類別されていて、「足」「坂」「土」などの第三類の語彙は、平安末期にはしなくなったのが、室町時代にはHしに変化して「石」「川」「人」などの第二類と合流したような事実が知られているわ

けで、それと同じことを漢語でもできないものか。文献上確認できる漢語をアクセント型に類別して、時代ごとの変遷を明らかにするほか、方言アクセントとの関連も分析するという切り口があり得る。このように考えていくと、問題点は多岐にわたるとはいえ、手法や方向性で迷うことはあまりなさそうであるし、これらの中には、金田一春彦氏や奥村三雄氏などの先行研究の中で、すでにある程度の見通しが示されているものも含まれている。

加藤大鶴氏の『漢語アクセント形成史論』(以下「本書」)は、漢語アクセント史を専門に論じた、おそらく最初の研究書であり、日本語音韻史に関心を抱く者が待望していたものである。本書の構成としては、まず序章(本書の目的と構成)で本書の概要を述べるのに続き、第1章(字音声点を分析する上での基礎的問題)で『医心方』に出現する字音声点について、基礎的な考察を行っている。声点をどの調類として認定するかに始まり、中国原音と漢語アクセントとの対応関係について論じるほか、声点の加點目的、注釈書の利用の実態と声調との関係などに及ぶ。第2章(原音声調の継承と変容)は、『医心方』のほか『宝物集』・延慶本『平家物語』などといった日常漢語アクセントが採録できると目される資料を対象にして、原音声調がどのように変化して漢語アクセントに至ったのか:「字音」から「語音」へと展開したかの解明を試みる章である。漢語の性質や拍の組み合わせによって出現しやすい型が存することや、その一方で、個々の漢語に即して見るとむしろ拡散していく事例も観察されることを指摘するほか、日本語として不自然な「中低形」を回避するあり方も一通りではな

いことなどが明らかにされている。第3章(漢語アクセントの形成)は、体系としての漢語アクセントの振る舞いに着目した章である。「平声軽」の性質が和語の「下降調」とは性質を異にしている可能性に言及し、また「去声(上昇調)」が含まれている場合やアクセント体系の変化(南北朝期)をまたいだ場合にどのような対応関係・歴史的变化が見出されるか、拍数の違いはどのように関わっているかなどを吟味して、終章(原音声調から漢語アクセントが形成されるまで)に至る。

漢語アクセントの歴史に関する専門書というのが、従来これほどまでに少なかった理由というのは、やはりあると思われる。本書を読んでいくとそれが分かってくるのであり、冒頭に示した「構想」が、いかに甘いものであったかを思い知るのである。

漢字に加えられた声点を分析する際、最初に考えなければならぬのは「この声点は何を意味しているのか」ということである。中国語レベルの声調を示しているのか、それとも日本語の漢語アクセントとしての一部なのかなどは、当然声点自体に書かれているようなものではない。『補忘記』では、字音声調は声点で、漢語としての音調は節博士で示すという住み分けができていて、そういう資料はむしろ例外である上に、その節博士の内容も日常漢語アクセントとはやや隔たりがあると考えられる。文献資料に記載されている高低が日常漢語アクセントそのものであるという保証はないのであって、本書を日常漢語アクセントの歴史を簡潔に述べる本だと思った読者には、意外に感じられることであろう。

さて、本書でも入念に論述されているように、漢語アクセント

の歴史を論じるに当たっては、当該字の元々の声調(= (字音) 来源情報)を特定する作業が、全ての考察の基礎になる。『広韻』では平声、呉音資料では去声という漢字があって、それに平声点が入記されているとすると、この平声というのは漢音声調である蓋然性が高くなる、という要領だが、実際にはこれほど単純に進むものばかりではない。

まず漢音(『広韻』)で平声の字は呉音では去声(基本的に、呉音に上声はない)、漢音で上声・去声の字は呉音では平声であることが多く、しかも院政期頃からその対応関係が増幅される傾向にある(高松政雄『日本漢字音の研究』(風間書房、一九八二)第三章(二))。呉音声調というものにも流動性があることに加えて、『法華経』や『大般若経』などの呉音資料に掲載されていない字については、そもそも呉音声調を推定することができない。議論の出発点に立つのが案外難しいのである。

それが複数字から成る漢語を議論するとなると、呉音語か漢音語かの識別が容易になるどころか、むしろ不確定要素が倍加する感がある。例えば、一字目が呉音声調と、二字目が漢音声調と一致するような場合は、元来呉音(漢音)語で、もう一字が漢語アクセントとして原音から変化したものなのか、漢音・呉音が混じっている漢語なのか。声調に仮名音注、清濁、連濁など、傍証はいろいろあるのに、たくさんのヒントが同じ方向を向いているとは限らず、その結果複数の合理的な説明があり得てしまうのである。

本書に、和語のようなきれいな「類別語彙表」が示されていない

い理由もなしとしない。語類に分類される和語というのはせいぜい二〜三拍程度であるのに対し、漢語の場合は拍数が多くなりがちである。二字漢語の場合、最大四拍になることから、場合分けが煩雑になることが、理由の一つであろう。しかしここでは、そのような、どちらかというと技術的な問題よりも、漢語という語種の特質が、むしろ大きく関わっているように思われる。

表3. 28、表3. 42、表3. 43でアクセントの歴史的变化に言及されている漢語は合計四〇〇語あまりであり、秋永一枝ほか編『日本語アクセント史総合資料（研究篇・索引篇）』（東京堂出版、一九九七〜一九九八）などを念頭に置くといかにも見劣りするようである。将来、研究が進むにつれてこの数字は増えていくことが、当然予想されるのであるが、劇的に充実するようになるかと、評者（石山）はやや悲観的である。

いったい、漢語とは借用語であるために散発的なところがあり、それがあるところでは「延べ語数が少なく異なり語数が多い」という形で表れ、またあるところでは「一つの語が時代・資料をまたいで使われ続けることが、和語に比べて少ない」という性質に結びついてるように思われる。例えば『本朝文粹』に出現する漢語というのは一五一一語にのぼる（柏谷嘉弘『日本漢語の系譜』（東苑社、一九八七）ものの、本書で言及されている漢語のうち、例えば日常的な漢語のように見える「合戦」「奇異」「居住」などは、『本朝文粹』には出現しない。漢語には「広く薄い」傾向があるように思われる。

結局、漢語の中には、日常語の中に溶け込み、和語と同じような振る舞いを見せるものから、散発的にしか受容されなかったものまでが混在していたと目されるのであり、同一次元上に並べることができないのである。このことは、2. 2節の結論部分で、慎重を期して和漢混淆文の事情として書かれているものの、漢語全般に言えることだと思われる。こうなると「個々の具体的な漢語のアクセントがどういう道筋をたどったか」の用例を豊富に示し、帰納的に論証するのは困難なのであって、その代わりに「漢語アクセント『というもの』にはどういう特徴があるか」という別の論点が浮上することになる。このあたりも、和語アクセント研究とはやや異なった手法が要求されるところであると言えよう。

結局のところ、漢語アクセント史研究とは、一見すると間口が広いようでありながら、いざ厳密に考察しようとすると次々と難点が立ちはだかる分野であるように思われ、手を付けようとして挫折した人も、過去少なかつたのではないかと想像している。漢語アクセント史研究とは、論理展開のしかたによっては「何でも言える」反面、慎重になりすぎると「何も言えない」ところがある研究分野であって、本書はこの折り合いを付けつつ、深い霧の中から一筋の光明を見出した労作であると思受けられる。

なお本書は、二〇一六年に早稲田大学より博士（文学）の学位を授与された博士論文を元にしたものである。

（二〇一八年三月 笠間書院 A5判 四七二頁 本体一〇〇〇円）